

第4部会

そして、クエルナバカのフランシスコ会修道院で壁画が描かれた理由について、クエルナバカはアジア貿易の起点たるアカプルコ港に至る陸の要衝地で、アジアでの布教や交易を望む修道士や商人が必ず通る道であるから、二十六聖殉教者の偉業を記念する目的で描かれたのではないかと考察した。そして一般信徒にとっては殉教者に対する崇敬を高めさせ、修道士にとつては日本布教への熱を高めさせるための一種の宣伝媒体になったのではないかと考えた。

キリシタンにおける近世と近代

内藤 幹 生

キリシタンの信仰態度やキリシタン自身の方々は彼らを取り巻く社会・国家の時代状況により変化し、時代により異なった姿で現れた。本発表では変化が著しかった近世後期と近代初期における長崎浦上村のキリシタンの信仰に注目し、それぞれがどのように異なっているのか、時代とどのように関係しているのか、明らかにする。

当該期のキリシタンに関する研究は、主に外交問題や権力側の宗教政策からおこなわれてきた。また、キリシタンの動向についてはキリスト教的（カトリック的）な信仰心を貫いた者たちの動向に目が向けられてきた。当該期のキリシタンの信仰がどのような姿で現れ、取り巻く村社会やキリシタン集団内部に

どのように影響したかについては検討のよちがある。本発表ではそれらのことをふまえて、近世後期と近代初期における長崎浦上村のキリシタンの信仰について検討していく。

江戸幕府により徹底化されたキリシタン禁止政策はキリシタンに対するイメージを肥大化させた。キリシタンは危険視され、危険で奇怪なもの表象と認識された。しかし、実在した潜伏キリシタンの姿は全く異なっていた。近世後期一八世紀末以降に何回かキリシタン露頭事件（浦上一番崩れ、浦上三番崩れ等）が発生したが、この時にキリシタンは幕藩制秩序の周縁的存在である「異宗」として処分された。それは危険で奇怪なイメージで定着していた実際のキリシタンは、イメージとはかけ離れた従順な農民であったためであった。そして、「異宗」とされたこの時のキリシタンの信仰は作物豊作、諸願成就、福徳延命といった現世利益主義的信仰と来世救済主義がセットとなったものであった。それはまた、秘匿性を強め、他へ知れると信仰ができなくなり、そうなると現世利益の保証もなくなるというものであった。禁制下で隠匿し、信仰を継承し、発覚されても「異宗」とされた近世後期のキリシタンの信仰はこのようなものであった。

近代初期の幕末から明治維新にかけて浦上四番崩れというキリシタン迫害事件は起こった。これは、慶応三年（一八六七）にフランス人宣教師により教化されたキリシタンが旦那寺をよばずに、自分たちのやり方で葬儀を行ったことを発端とし、江戸幕府・明治政府による迫害事件に発展した事件である。この時のキリシタンは来世救済主義を突出させ、キリスト教（カト

リック) 以外に魂を救済する教えはないとし、また、信仰態度を隠匿から表明へと変化させた。これは来世における靈魂の救済を高めたキリシタンは表面的であつても、旦那寺へ帰依することは耐え難いことになり、来世において靈魂が救済されるならば現世において罰を受けたり、迫害されても隠匿せずに表明しようとしたためであつた。浦上四番崩れにおいてキリシタンはこのように信仰内容と態度を変化させたのであつた。

浦上四番崩れにおいて信仰態度を変化させたキリシタンであつたが、急速な変化から信仰をめぐる問題も発生した。浦上村内では(カトリックに改宗した)キリシタンと非キリシタンとの間の確執が表面化した。それは親戚仇視や夫婦離絶、キリシタンでなければ村づきあいが出来なくなる、などの事態であつた。また、寺請制度への拒否に始まつた浦上四番崩れであつたが、カトリック入信を改心し、旦那寺への復帰を願うキリシタンも現れた。このように信仰態度を変化させ、キリスト教(カトリック)以外の信仰を拒否したキリシタンが現れた一方で、急速な変化に抵抗を示したキリシタンも現れた。これは、それだけ浦上村のキリシタンの信仰が多様的であつたことを示しているといえる。そして、それは禁制解除後にキリシタンが復活キリシタン(カトリック改宗者)とカクレキリシタン(はなれ)とに分派したことに對してもいえるのである。

ブラジル産ネオペンテコスタリズムの

日本における展開

山田 政 信

キリスト教神学における、三位一体の第三位格である聖靈の働きが人々に救いをもたらすという信仰は、ペンテコスタリズムと総称される。ブラジルでは二十世紀初頭にアメリカから伝えられ、それまでドイツ系移民を中心とする民族宗教に留まっていたプロテスタントイイズムを広くブラジルの民衆に開放させたという歴史を持つ。ポルトガル人による植民地化以来、ブラジルでは長らくカトリック教会が強い影響力を持っていた。しかし、一九九〇年代からはプロテスタントイイズムの伸展という顕著な宗教変容が看守されるようになった。その要因のひとつにネオペンテコスタリズムが挙げられる。

ポール・フレストンはブラジルのペンテコスタリズムの特徴を時系列的に次の三つの波で区分する。アメリカ産のペンテコスタリズムが移植された一九一〇年代の第一の波、一九五〇年代にサンパウロで派生した第二の波、一九八〇年代の「失われた十年」にリオデジャネイロで生まれた第三の波。第一と第二の波の教団は布教方法に違いがあるが、いずれも個人の内心倫理を重視する。一方、第三の波の教団では悪魔祓いを重んじ個人の罪の意識は強調されない。また、追い払われるべき悪魔は民衆宗教として受容されているアフロブラジリアン宗教の神々である。このように、第三の波はそれまでの教団と教義レベル